

平成 17 年度 (社)日本都市計画学会 論文奨励賞を受賞して
多時点断面データと SP データを用いた交通行動変化の非集計分析

神戸大学大学院経営学研究科市場科学専攻 助教授 三古展弘

略歴

- 1975年 愛知県に生まれる
- 1999年 名古屋大学工学部土木工学科卒業
- 2001年 フランス国立ポンゼショセ工科大学
国際経営大学院修了
- 2002年 名古屋大学大学院工学研究科地圏環境工学専攻
博士課程（前期課程）修了
- 2005年 名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻
博士課程（後期課程）修了
博士（工学）名古屋大学
- 2005年 現職

1. はじめに

このたびは、栄誉ある日本都市計画学会論文奨励賞を賜り、誠にありがとうございました。受賞の対象となりました論文は、2005年に名古屋大学に提出した博士学位論文です。指導教員の森川高行教授、副指導教員の林良嗣教授、山本俊行助教授、また、各種学会において多くの先生方からいただいたご助言ならびにご意見に対し、深く感謝申し上げます。

2. 論文の概要

本論文は、将来需要の変化の源となる交通行動の変化に関して、近年適用例の多い非集計モデルを用いて分析しています。分析は大きく、1)長期間の多時点断面データを用いた分析として、長期にわたる、交通行動に影響を与える要因の経時変化の解明と長期の行動予測に適したモデルの検討、2)SP (Stated Preference)データを用いた分析として、行動変化意向情報を含むSPデータの利用可能性の検討、に分けられます(図を参照)。

1つ目の長期間の多時点断面データを用いた分析では、中京都市圏の過去30年間のパ

ーソントリップ調査データを用いて、交通手段選択（利用）を中心に、それに先行する意思決定である自動車保有の選択や居住地の選択との関係も含めて分析し、交通行動に影響を与える要因の経時変化を解明することを試みています。分析の結果、それらの要因のうち長期的に安定・不安定な要因に関する知見が得られ、この知見が需要予測の精緻化につながることを示しています。

2つ目のSPデータを用いた分析では、まず、様々な非集計モデルを行動変化意向の表現可能性の観点から新たな指標を用いて再評価し、行動変化意向の表現には非補償型のモデルやSPデータを利用したモデルが優れているという知見を得ています。また、選好無差別情報を含む（マッチングに類似した）SPデータを利用したモデルが、従来の選択形式のSPデータを用いたモデルよりも推定精度において優れていることを示しています。

3. おわりに

本研究の行動変化の分析結果を実際に社会へ還元するためには、さらに研究を進めることが必要です。今回の受賞を励みに努力する所存ですので、今後とも皆様方のご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

- 余白1行目（写真）
- 余白2行目（写真）
- 余白3行目（写真）
- 余白4行目（写真）
- 余白5行目（写真）
- 余白6行目（写真）
- 余白7行目（写真）

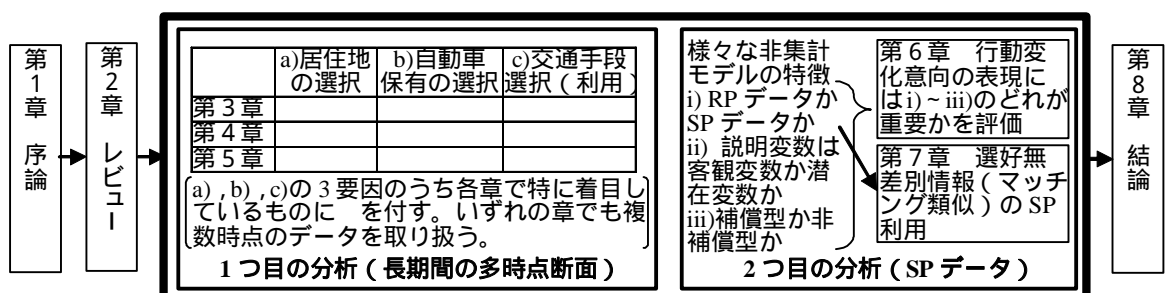


図 論文の概要

余白8行目(写真)

余白9行目(写真)